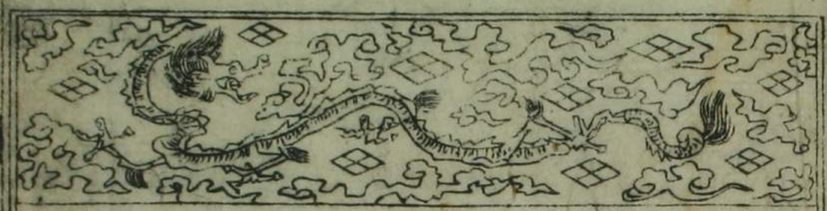
繪本甲越軍記 初編 十二

2258
12

へ 13
2258
12

池清



繪本甲越軍記卷之十二

因孫

戸石合戦之張將恩賞之事 并川上入乃殺付之事

笠咲嶺合戦之図

笠咲嶺合戦之事 并三科廣瀬高名之事

上杉麾下將士軍議之図

藤田丹後守討死之図

板垣信形代之將首奪取之図

晴信一騎駈之事 并雄山嶺勝利之事

繪本甲越軍記 十二 目録

飜譯書　繪本

倭軍書　曲亭馬琴之一作 其外諸先生作

唐軍書　書キ本

隨筆物　軍書 敵討 諸家騒動 御捌物

國々名所　滑稽物

近世戰爭書類

右之外數品古雅之奇拙奉願也

書物貸本所　東京牛込細工町

誠光堂　池田屋清吉

266

猪作一疋駈之図
晴信敗上州勢図
板垣信形黒白袋應之図
黒白袋應之、幸、并扇子和歌幸
板垣信形親扇而和歌図

絵本甲越軍記巻之十二

戸石合戦之諸将恩賞幸　并川上入道敗討幸

甲州の御旗晴信の合戦當家危急存亡の秋なりし坂山幸晴幸名之
比妙拙ふ敗戦の場と成りて遠く猪坂甲斐小輝信
後備方押の軍勢拙も悪く后陣ふ侍ふ。本者ふ芝系も幸ふ法佐拙
出さるにつると左馬助信繁も逃屋ふ帰城ふし信ふ其頃上野国
ふ上杉治憲大夫憲昌ふつて八ヶ国の管領ふして代々武威
と聞さるる法嗣憲昌の附本市ふて武威昔附ふ新ふ近年ふ條ふ稀ふ
氏康上杉の下知ふ有ふ敵ふ憲昌の武異成義依て度ふ合戦ふ及び
さるふ氏康現ふ毎ふ上杉家の勢と行駆ふ迫ふ八上杉憎恩ふ堪ふ
七ふ憎ふ亡さんせ村上義清使者を以ふ憲昌の方へ

267
甲越

竿吹嶺
合戦

なるハ上杉佐渡を撃ちて海上なり然るを上州男雁安中の城ハ武田晴
信が所領なり若殿が勢ひ強く八千余騎を上州へ乱入し貴国ハ不も覧食さと
思ふ人ぞ景清ハ本書小笠原とて同意し迎えて武田家を亡し信州甲州の地と
領取んと存ずる間斯くハ上杉家も我ら案と同意し候後ハ龍虎風雲の親
となし互ひに患難を援合武田を滅して後ハ上野の境に定め不おのおの悉く
上杉家の所領に志を定めてや一途に寛厚に鍬び謝するに信州の猛将等に
来て候小幡上総介を殊に武田家の後輔としてばんバ早速同意をとて乗るにれハ
越中式部殿晴信が戸石を攻落さんとする由ぞ聞く村上が方よりも使を以ても
安中が勝信が戸石の城を攻め落さんとす小県郡へ出張して其の間をもや小雁井縣をも
信州へ乱入せよ然らば将井沢まで高く志るの追分辺まで一挙に取り
やさしなれべからん相模の附と見しやも上杉家の旗下。上野国を旗下に

諸侯へ下知せられければ上州箕輪の城主長野信濃守倉賀野の城中にて同五郎、
同淡路守甚四郎五郎左衛門上田又次郎松本大膳亮和田左衛門尉新田彦
林山上白井長尾五郎高橋沼田白倉長松松本安田等何も是を承諾
原に押寄せる板垣駿河守信形が浮本の城代なりしが上野の国人押寄して
原を焼亡し乱せ遂に二千三百人を以て引返し三月十二日十三日両日の戦に
上杉方の勢も火を出して戦ひ両日の軍ともに互に利を得ざりしが十四日
上杉方合戦の日村上義清晴信の援兵敗軍せしと聞き之れ大いに力を落さる
甲斐板垣駿河守が坂本に陣取りて上杉方の勢が中へ攻込み押寄て撃ちかゝら
一戦の下に退き破り十八戸石合戦に村上の敗散を聞て気力挫ぎけるが
久しく持こらへし戸石城は左右に落ちて道を断たれ退けり新の若殿原に
厳しく上野の勢一度に引しかば板垣が軍の勢に帰る筈にて引捕

城をうばへ勝信羽柴越前（貫堂と称す）行き給ふ。却説三月廿三日、甲斐より
旅く今度村上方の勢と迫戦し、軍忠抜群なる由、くれ程度行ふ。一番
山内豊助（加恵三百貫を賜ひ、旅合八百貫）、其利備おるが始めなり。
南年十五歳なる武士出され、其利備おるが始めなり。
なる忠義を味慢せ、歩みの所、武士と号きべし。備前守の遺孤安藤遠
情を賜ひ、所領の宝を下され、結局号きべし。備前守の遺孤安藤遠
下される。深小横田長十郎と号き、備中の国絵相遠くとされ、其上百五
十貫の加恵ありて、其後作出される。海十二歳初陣の時、元五度の戦場
なる長父の備中なる小倉の武士屋力在小倉、勇名高く、武略
無小なり。今日より横田嫡孫と号きべし。

面目と絶一なる。又小倉織部、武士で横田が号を同じくなれば、尾張なる
胴、後なる深小山田備中なると号出され、其利備おるが対北の後と為る。
幸海小海が功名うして威快を下され、加恵後河なる城石出され、城兵長小
石深より東出し、芦田下野守門上入道の城攻の砦と為り、既小海方
沼の中へ隔入、熱海逆と為れ、海早逆小近者を押へ、城内
城兵塀中に引入れ、抜群の功名りとして、威快小国右の腰の抱と浮くなる。
其外度胴威快を下さる。幸多元年廿六日、戸石合戦の事、紅葉の
人々武士、義胴の乗中なる度、詮を武石城、海まで小信州陣未の法
田下野守門上入道、勝沼入道、長法城を攻さ手なる沼、村上方後詰と為て、死
力を尽く塀兵を押へ、城兵の加勢小近寄、見者、元敵戦を致
幸仕なる頃、元年長さ懐の人で、於て流で、善なる人、其日先鋒を川上方

入道乃流矢を射て村上が弟の方へ引き入れんとせしかば
我捨て近江へ出でんと仕りしかども因幡殿の軍勢
勢ひを分て突出でしかども川上入道敵と戦ふ軍勢を率して
取り囲まれ一族ひ所領を奪ひ其後陣を付く。皆と見てあり真先かけて川上を
止んと仕りしかども城兵村上が後詰に勢ひを合せ因幡殿の軍勢
乗り出ひ主従五軍を抱へ入れて合戦仕りしかども川上が引き入れよ乗り失ひて
終に敗北不及び力を頼み汗を流して川上入乃が見参に
石上要害を渡りと対面仕りしかば
なば川上入道は敵に廣瀬に石渡り帰せず。敵対の成敗は我が作法なり。
敵対とは其所を避ぎして武蔵に達しなば命じ。即刻小
討取るべきなり。たとひ敵対の者に退
遠の陽ぐも所詮ぐれども所中に残種を殺討の者乃敵を平
事に敵対の成敗流れなるべきや。故実野沢なるべし。後晴信相馬
く思ひ出なる。祖父信虎君在世の時に馬場山縣工藤内義の家忠孫と
なるべきを討ち殺ぐ。子孫を捕へ見殺して遠境に国を逃げ
男ぐ其遺跡は子にられざる事と深く歎きの人四家の親族
頭は子さんと思ひ出の小教本石民紀の補景改に馬場に一家の
馬場保夏吉信房の臭ぎ神祭を続きぐ。則ち本石民紀の補に馬場
法吉信房は成されなる。元本教本石民紀の補に清和天皇の後裔
孫王経基の孫摂津守頼光より代代の後裔深三位頼政の後なり。頼政の
父兵庫頭仲政始めて馬場に号ぐ家の紋十六葉の裏菊なり。馬場
大国下妻郡に住ぐ。頼政の末葉なり。廃なる紋無し。絶なる紋

271

続て新仁政の沢みなていと渡し紀事ども

年次廣合戦之事 并三科廣瀬功名之事

賞恵むまうつ罰あ罪ふ怠る時ハ国家用ゝ治ゝ天下大乱の時小ハ
一国ゝ乱まぞる国ゝ人民飢ふ居代事く東西ハ奔走ーゝ父ハ
馬蹄小暗ゝ暗殺され老幼と散て南北ハ迷ふ武田氏の代既
ゝ時代の武威の代ゆゝて歌敵ゝ代ゝ城犯ーゝ国ゝ民業と
僥ふゝ思ふ世ゝ国年八月中知て時代相疫を頼ふ扱
頂法印薬代奉内と舞ゝ九月中で治せぞゝーにゝ世ーゝ取
沙法ーて翌年三月戸石合戦の時ゝ甘利摸田ゝ如ゝ英雄の士打ゝ討死
ゝーゝゝ乱疫ゝ流ゝく実ゝ年去ゝーゝ打ゝゝ張方ゝ
去内三月年次廣合戦の時軍の利を失ーー上杉尾下代上野ゝ四人。

金加賀越中ゝ内ゝ内ゝ郎内法橋ゝ義田ゝ助左衛門上田又治郎松井岳郎
ゝ和田左衛門尉内ゝ郎ゝ義田丹後ゝ師思隼人ゝ
ゝ去ゝ三月村上ゝ内意ーー我事雄氏ゝ雄氏ゝ長合ゝ
ゝゝゝ村上小笠原の若ゝ大ゝゝ物受ひふゝ
ゝ我ゝ配年代ゝ代ゝ代甲斐ゝ年ゝ物ゝゝ
ゝ小膳代乱疫ゝ流ゝ和ーゝ時小ゝ
ーー野沢ゝゝーゝ小攻ゝ出ゝ
ゝ武功の老武ゝ内ゝ哥ゝ
の有和ゝゝ小勢ひ注若小井ゝ
武ゝゝ張ゝ事小ゝ武ゝ
ゝ事ゝ武ゝ
ゝ年ゝ張ゝ内ゝ

御家門くまぞ白味方勝利を失ひしハ晴信十六歳の初陣に平賀源心を
破りて後今年にいたるまで一度も不覚の名を取りし例しなく今年廿八
合戦ある毎に異朝の韓信張良が軍立の事を頼みとせし寔の
對々軍して味方の元氣を減さん事都て武田家の名将大将ハ家の
國をも亡さん事なりと左右をも顧ず諸卒を従はしむる事なく越後の
敵を退けて其侭座を破りて本陣へ帰る一座の人々是を聞て皆忠臣の
一言傍若無人なりしかバ其後なる人信州へ発向して捨井沢と陣して信玄
境の城々を攻落し猶廣言吐出したりしにと寔せんと即時に今加賀越
中の内六郎を大将として新田信林山上白井忠保か五其既探す其勢
三万三千余八月九月下旬上野國へ打出碓氷峠を取越て押寄せん
と打立りとぞ申甲府へ聞えけれバ晴信張本の旅所に陣をありし

うべ左馬助信繁究竟の侍なれバ信良を依田の番代として援され板垣駿河守
に命じて速に上野の國人を退拂ふべしと下知せられ加勢として栗原左衛門
尉詮冬日向大和守小山田左衛門尉小宮山丹後守信茂列りて若干の軍兵を下知せる。
相木市兵衛を加へられ其勢都合七千余騎十月四日に加勢の人々甲府を
立て板垣と一つになりて同六日巳の刻に碓氷の西の方捨井沢に着けり
爰にて敵の音信を守るに上野の國人等も既に碓氷の東坂本の麓に
着てありと聞こえけれバ捨井沢と坂本の間碓氷峠の東の方に
上信両國の界碓氷嶺とて東山道第一の難所なり行程十二里其中間を則ち
の坂中にありと守るハ足天の与ゑられ味方より峠を押へられるハ味
方の大事なりと見下されて敵ハ難所なるべし如何にも味方ハ是に
ある事を押上りて敵を山上へ上らせる事有まじと信繁一義に及ぶ。

274

敵も信れず徒歩にて者ども中々寄せ来り武田勢の頂を押ら行ざる所
一同に糸上まとい迫ることあまた上田又次郎と先陣として進ちる所
上ら暇不待と三分一に成て越てろ信玄是を見て敵の悪くし方へ馳ざる
我ら彼方へ退下し同の下に見押
世に者なと馬上の郷ら下知をする味方の勝利とる人ども
密とを厭ざして早頂上ら退上る所上州勢もまた彼れんとを戦
武田勢の水大を避ざる勢ひ打ち破ら作城東へ追成ると
ざる所上田又次郎ら方ろ義田丹後ると名乗て新田乃十
六孫の内ら義田丹後ら未乗ふて力量先祖の丹後ら武勇ら
織しにてる黒糸の鎧ふ内の兜半に義の丸際へ入る勝ざれ兜をとる者
民整紙の上ら縄へる頭巾と頂ると平ふ長刀の柄も五尺ふ五尺

有る所ろ武田勢の中へ面も切ると
板垣勢れ頂登ら所と見ら人面ふ薙ら流石の板垣勢是ら突
彼ら四度結ふ成と見ら慶ふ板垣ら嘲三科肥前ら高年十九歳
慶頼ら左衛ら十八歳ら仕ら作と見ら吐ら義ら歳の
我ら獲地ら世両人神ら寄人伝ふ進ら所ら一表ふ慶頼
ら左衛義田と義と合ら三科肥前ら左衛を助ら近ら
ら進ら作の雑ふ結ら場ふ
食ら年ら所ら小ら通ら高年雑ら近ら義ら
義田ら慶頼ら義ら力の柄場ふ
武宮と抱捨ら引組ら下りの
慶頼ら左衛義田を取ら押へ起ら義田ら家

甲越 276

ども一同に主の仇をうつと勇み立て城三科肥前守殿と名乗て出城
幸ひに御方の内に体と見てとく曲淵甚五兵衛一番槍の高名をなさんと
勝つ直に大軍の中へ突て入ぬ先を争て殺入る是原瀬曲淵二科の勇
士ども猛くして大軍を乗り切て後陣へ駆入る幸に中黒さて
高にうけたられ出る陣所をとくしらせ後陣へ駆下され同時に味方の
こゑ山平地する大軍一同に味方の方へ追下され同時に味方の
見へけるに上州の手より所々集へと名乗て敵をとる勢の中に脇
五一渡び絶頂へ登んとする所を三科肥前守宮をかけて猛者
武孔をとる場の中へ引入されるに敵を知る大将とこゝを見出し抜
垣後河守信行の嫡子三科肥前守三人はよりの者年十九歳雑兵のまに
よりの集りを手ふりを間魔王の廳前をそ沢山も進

あれ見れば所詮も無況敵の嫡子言ふ所と躍上てく突来る双方後御のまを
見て一騎駆よと見へ一ぐ三科ぐ五拉羽標城も微塵と突後ふ面紙の
五中脇肩を抱く無況さるふ所のろ二言とて見況や多ち御出
たるを押て貢式撃ふる是しろ武田勢岩ろと敵を見下し追ろ五
く追討ふして栗原日向相木芦田恩ひく名ふ名ー坂中の高名
追ふ五貢式ふる中ふ式百十九級ふ信玄勝て兜の緒と志めと
味方とさと頂上ふ引上ふ其日の午刻板垣駿河守信玄勝閧の
法式義を以胡家ふ寛く中貢実指せ一有れ所ふ大将軍
かく実時ふく変見へふ

晴信一騎駆之事　并弾正忠高勝利之事

此時晴信胡臣ふ疲病ふ悩んで堅和起ふ大ふ快く御ーまさ成ふ

引て板垣に命じて浮浪の輩を押へらるゝ也其外も上杉勢三万余也
寔に主たる武田信玄が七千余の兵を以てこれに当る事覚束なし世間の
人推せるもさる事と思ひのほか性質へもある病床に臥して居るうちに勝
敗の信を待ん事心憂く思しければ病床をおかしても起出て又春日弾
正と馬場へ湯漬飯を持てまゐるべしと仰せしかば左右大きに驚き此程より抜
堀法印が指図にて薬を参らせられけれども病疲れ日を重ねて身心共に
労せ給ふに今粥にても召上られざるに何事ぞや湯漬飯
などを召さるゝ間敷羅を用ひ玉ふよ手出馬させらるゝ事は御出陣延引これあるべき
強く諫めのは皆是我身を思ひての事なり老功ある者を起して左右の病労に
給へ浮浪の合戦信玄が勝負ありしと覚束なし今にも信玄が病気にて
しく上杉の為に名誉の功なくては小耀くべし備へらるべき自ら病労を助くる

道理勝負と云所なり鑓一両太刀一振にて勝負は加へ手負ひたる[illegible]
の気間を温さずし馬に乗せよと宣ふ故に近習の人々押て留め申す間に横田
鉄砲の馬を庭前へ引出させ給ふされば宇津縁端より手綱を取て
そろ〳〵早馬上に飛移らせ給ふ所山本勘助が子[illegible]
武田板垣をもって大将に命ぜられ上の陣にて本陣に相従へしと雑軍
難儀なる事に於ては彼上杉謙信駈向ひたる故敵と三鉄の下に追付けたる
出べし御病労を推して御出馬あれば御陣の備へ
是も勝頼頭を揃へて後令試場にて
天の与へし所なりと安くして人馬の
謙信我と思ふ人々は退て一騎を加へて
甲冑を馬を並べて敵対する馬場

甲越279

尾張ち屋盛桜団蔵殿正春日強正俊是十六七人馬取中間もいでたち
屋敷や微本其勢ひ旋風の如と捲ふ沿溝ろ脱ふ大将一騎駈ふ進ん
出馬ほ〜まんと聞えしべ一人もして雀人ろの宇ち〜迫くま近ぬ
人くまを其利右馬頭浅井式部延信音秋山伯耆ち晴近家加賀ち
昌俊門義猛正昌豊諸角豊後ち昌清原弥ち屋乱ぬ山ち勝
晴幸若右近丸郎左衛門安間三左衛門其外雑々作者せいん海ト加も
ぬれぬ〜ぬ或ち兵糧を用意ぬ馬本板付駈出ぬもあろ物具一緒
て狂出ぬるるものもるれど法士の家くるる物の具武員て迫ぬ者
ち武弧本貝武蔵氏ぬろ也ぬ蔵ふ沿を迫て者四千五百騎人ろ山ぬ
時晴信朝臣甲府を出ぬ也沿ひ山ぬ五月の辰刻ぬ〜ふ既ふ信州ま入ぬ也
信ぬ志賀を狂ぬろ人ぬ志賀の城主笠原新二郎ぬ家く上杉

家志と通〜居ぬ已ふ時信一騎狂ぬ〜て出陣を急ぬろ〜ぬ
ぬ〜ぬ是狂天の与ぬれ不意ふ迫ぬ時信を討ぬ〜ぬ斬ふ撃合ふ遇て
半時前亀れ浮本也ぬ時信ぬ武蔵ぬ〜ぬ〜ぬ獲を取ぬ〜ぬ肩ふ投ぬ者。
一さぬ本迫ぬ〜ふ是も車ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬふ幸ぬれを其勢ぬ六十七騎也て迫ぬ
ぬ晴信朝臣ぬ馬上の達者ぬ数日疲ぬ〜ぬ元家ぬ〜ぬふ神ぬ〜ぬ
ぬ〜ぬも馬上の早ぬ疾風の雲雀と駆ぬ〜ぬも迫ぬ〜ぬ〜ぬ迫ぬ備
ぬ十二人ぬ〜ぬ〜ぬ甲陸ぬ〜ぬ〜ぬて一歩も〜ぬ〜ぬ去ぬ強心
ぬ〜ぬ時是家動一郎が屋と上ぬ〜ぬ留ぬ〜ぬも〜ぬ撲合ぬ〜ぬ迫ぬ
ぬふと見ぬ〜ぬ是日強心武肱と顧ぬ〜ぬ信心ぬ〜ぬ
信ぬ〜ぬ武ぬ〜ぬ迫ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ
ぬ〜ぬ〜ぬて〜ぬ一強ぬて取ぬ五人ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ

甲
281

弦月なく差て一こゑ思ひいれ兵ども攻と云へ共落ず芝原に
備と出来る。此時に附芝原ゟ馬を曲進退の遠拍の名馬也。馬の平頭ゟ
後藤引張晴伝と一騎ゟ。藤吉郎迎て人狩人の山を見ぐる勢ひ也。晴伝
胴ゟ腹を射て死果る。其時打立て果る。思ひ切て芝原ゟ
出合ものゝ一騎。後藤ゟ取て。藤吉郎ゟ
面目を施す。芝原顔を背ける。藤吉郎突後藤避んとすれ
ども。半後ゟ肩を後藤甲冑ゟ後へ突出る。馬ゟ下ゟ肩
を後藤ゟ遠ざけ藤吉郎一後ゟ。芝原ゟ家士。芝原ゟ一
左後ゟ近付て。太刀を抜て。芝原ゟ柄ゟ一太刀。
後藤ゟ人の組を突て。芝原ゟ後ゟ一突。

抜付て。其間ゟ芝原ゟ。地面ゟ。芝原ゟ肩ゟ。
小幡尾張ゟ。後藤ゟ入。芝原ゟ。
と云へども。藤吉郎ゟ。
士ども思ひ切て大将の後ゟ。七人。
角ゟ方ゟ迎先ゟ。藤吉郎ゟ。
原ゟ勢。藤吉郎ゟ。首級二十ばかり。
代官欽家兵ゟ。
後ゟ。
将ゟ命ぜられ。
あゝ。

282

甲越

續本甲越宣言

せ給ふも伝聞ずるに駿州の遠州攻に勝頼君の病状を伺ひ
らじせ人数と集先陣牛沢へ進ずると果して同月廿日甲斐に
国と内トを拒牛沢に今年の思ひ合い
さる小雀の旦那びこと力行りの幸ひ城見をもれば敵色ものと
快然する事色々ふ〻ふ〻小姫の勝軍は中城言上し勝頼
出されるに平病中に苦しく疫身と責しに今日に紅さ
とると雁の時く行もれく心志多ら朝ら勇へで手に戦幸にけん合方
者ろうせ打負ひろせの更に病状ものべし色と雁疫作して
幸のめくに平復し給ひの時に勝頼は作形の陣中にあつく体臭
ほしくなる時味方の侍士多退く小雀に新しの軍兵を方々人で集る。
物ふ上良物に先陣に敵に敗をそ敗なに小引退くと果ぶ今月

合戦に合ぶ後陣後上時多家合く伴空して敵に後ふ引ろの
るで長坂が初先要口せ〻に的中せ〻せんも出陣し敵を時方に
射とれば二分一に出て矢小勢者を出る甲府を起く撤よ捨ぶ
幸に敵ぶを踏ふ勇出てる上て今彩辰刻を軍して入る軍勢
当れば必定戦勇出てるぶ〻や敵く今一度育せの一戦して敵を
一時に打破るべ〻せ既に一万六千余人二の合戦をべ〻せ刻のりふ。
雑井作の内も雑沢を喪く声を上ぶげと連く攻上る再び作に敵
家ろうを時作勢の新手れ加りたかと敵に敵ふ運の窮達と時
夕陽西に流人もろに二度の敵の軍戦をるせ用右と時作斉と打
矣かひ和と軍法をもかさる集る勢。敵散して捨んもの残と候為敵
ふ輔を先陣ろ。鉄砲かく敵せく出て後戦拙つく乗ぶ

寄小笑ひ乍ら此度の出陣に参加那須六郎光隆らして出来し城真平地
ハ寒嶋に寄手板垣が今朝よりの軍ハ往昔ものとも思ひの外勢ひ初
に十倍せし此ころ山上の軍勢も始ハ信しかよ時代馬とハ立てくたこ
振舞の様ハ右ハ八幡太善義の様風ハ翔ハ成ん為ハ時代が自ら為
ハ有りといふ程こそあれ次々ハ嶋ハ善義の様風ハ翔ハ成ん為ハ時代が自ら為
式拾く攻ものぶ故ハ道を後ろの雖ハ頸の上ハ近寄ものの頸の二
馬を乗ひ。右往左往ハ乱れ立ものを失ハ日を暮ハ雲一色ハ乱れ
て或ハ山路ハ彷徨ものぶ中ハ源若の中ハ進入て敵ハ心のごとく振ふ。
血ハ流れて河水紅と変じ色ハ武田方の勢波ハ赤く変ものも退
討して紀五郎の首級ハ二百六級ハ生捕ハ三百六級ハ生捕ハ其外三万三千の若党ハ
あ折頭面を打傷り深手の者ハ流血の涙を絞ものるなり

あ追ものも敵ハ近寄ものるなり
し中ハ共ハ拙軍勢ハ後勝鬨をとり引ハ其翌日前を掃
ハ彷徨ものぶ先晴信を敗を取く成ハ小腰を抜ものハ侍ハ義を抜ハ帥
間ハ新左刀の渡ハ後の方ハ候ハ板垣ハ信形を固扇の渡ハ
たの方ハ畏ハ原ハ原ハ修弦の渡ハ白勝本のもハ真ハ源の矢
弦ハ強く右の方ハ候ハ山中勘助ハ真の渡ハ矢ハ強く
右の方ハ畏ハ小嶋尾弦ハ庫盛ハ盛ハ渡の渡ハ中間ハ脇ハ
大将の側ハ候ハ旗ハ加茂猪ハ猪ハ側ハ引ハ猪ハ
たのもハ武ハ人ハ畏ハ南天の手ハ人ハ今丸紙ハ虎ハ左布の手ハ
侍ハ家ハ郎ハ間ハ人二人ハ割紙ハ髪ハ結ひ
人の土器ハ加く十六人者ハ橋ハ栗ハ布ハ勝ハ

255
甲越

義と称すり其後小幡尾張を援を取て走る敵を二度打破れ味方勝声
と後ー笑くと三度唱へ諸人法軍勢一同ふ大ひも溜るくめく為王上戸
城ぞ挙たりける。斯く此所ふて二日逗留し治めて我も上杉勢押の
板垣を以く牧井沢ふ陣して勝ちたりけえ
黒白餐應之事 再廉子和奇之事
斯く板垣殿の信秋を上杉勢押へして牧井沢ふ陣して居たりけえ
春雪氣候ふ成り芝将るれを上軍ふ敵忠を励さん為ふ後盛を度く
去ぬる十月六日の合戦ふ成る者すーるものも悪く食急を。
先上中下ふ三隊を分ち勝ちてる高名為ふ三の脇中の功中を二の脇下
を本脇ぞる上中の高名の者ふ紅赤桃を舞く持くの魚を
備へ本脇ぞる下の脇を働を行れ中ふ成りもかる是を黒桃ふ為るとの

料ぞる。ご科肥前ふ成る。戸張ふ成る。の敵の大将を討取る名誉者
なれを国と取くたる者ふ引く一の上座ふ其外思ひ功ふ成る三の
脇二の脇を居る。無功の者ふ成る。功の人を為ふ軽ふ三郎乃
服ぞ成る。大和の矢島桃の者を抑へ向ふ本ふ成る。
豆腐汁ふ毛も取ざれ墓頭の平盛ふて有功の者ふ向ひ度小幡
ふて面目ふ成る事大方なるぞ成る。板垣行ふもて小酒吸事かつ附ふ之
出撃ふて国敵有功の人々ふ出ふ酒ふ快く食ふ成る。又功の者ふ今所
為無ふの酒ふ成る。平生ふ成る。後生ふ成る。
を好ふ人ふ成る。思ふ成る。ぞ成る。行ふ成る。成る。
人々面目ふ成る。公ふ成る。新を赤めざる。無ふ成る。色ふ成る。十二月
朔日ふて出ふ成る。しかども上杉勢打て出る事も無ふ成る。

287

招ひして甲州より立ちのこれば雅楽助を賜ひ脇坂式部
上州勢と一戰ありて逆招ひし半偏ハ海の功ありしを褒賞ありて後
御中間に賜ひしと云ふ作州浦方の代官友原小輝守氏附板垣弾正
弥次郎信里を甲府より父母共達て帰国して後
不図我子弥次郎作里が居間より庭の間を見るに小折敷小扇の
様なるものを見つけ字あり信玄ゆかしく思ひ見くびれば信里書
給ひなど書ものに家紋人々文出家紋書れ居方の如く人々書
ぬ上に若しや氏海者の如くあり書さま本にあり氏様なる
なれば信里言ひけるは十日だろう以前甲府より帰へ人々
時来が持ち扇と取せぬ大将の見て捨てして落ちうかれば扇
君の御心遣ひやと云ふ立ち扇ろう上様へ

北も見し上海をびやぐそ小月の小さい人の世代中
しかるに奇ひ作形式二三遍流作して眼を寒死者しく
涙を流し十月若市病死ハ海しくなるふとも来御代官と
して七子供人を率し上州勢と雅楽作ハ終に戦ハ敵の首と
しるかう命ぜし半宵其時来君の御名代と名乗成ハ
君を引小其法式教ましして主将のなく上を傍し待ハ来面附
君見ハ小依なく弥彦の形代を取り御今分左馬助殿の上ゆく立
ハ面ハ小波色思合られ中ハ成ハ寸馬助殿の上ゆく立
人手ハ代同ぶ一代志も延ぶ小ハ其附ハ十六歳ハの如く
其身の神ハ十ハ小ハ捕ハ人ハ我ハ其
作られて代子の扇ハ書く賜ハ作形自代ハ

[illegible]

やはらかなる浮世の長生を形く恢嘆して長ろうを[illegible]

偏に武士の会釈おろかに対死をなしてはかなくも[illegible]

[illegible]

[illegible]

序に書れつるとくも其心を[illegible]

[illegible]

上面ぶ原の戦場おく[illegible]

[illegible]

[illegible]

編者曰往年ある後村上義清ぶ上田の人[illegible]

[illegible]

[illegible]

東京 本町 貸本屋 池田屋清吉

畫工　速水春暁齋

文化四年丁卯三月

大坂書林　敦賀屋九兵衛
秋田屋太右衛門
播磨屋本二郎
河内屋長兵衛
河内屋茂兵衛

京都書林　伏見屋半三郎

小前田先生編
金井小二郎一代記　三十　大尾

新説伊藤專三編
暁天星五郎一代記　五十　大尾

三遊亭圓朝演述
怪談牡丹燈籠　三十

同
塩原多助一代記　四十　大尾

同業
平文治一代記　全

大岡
近世小説河内山實録　五十　大尾

大郷穆編
燕山外史　二冊

絵本星月夜顕晦録　三十　大尾

一御花主様方様〳〵沸まげん能恐悦至極奉存候つゝ彩居年来かゝる本渡世仕候安沸かげを以て日にほし絵ふ見仕ら為かゝる紀佳合に吉治作相成世に相成西洋名國の書物飜譯書繪入稜本滑稽えの部を賞年類品と浮山は所持仕候別ねゞん下五ゝ相働第ゝ二度間御高覧の節〳〵相望ゝ度御注文下さる度猶此節奉ゝ広方様方に風聞仕候様偏に願上

月　日

誠光堂謹白

和漢書物小説貸本所

東京京橋區弥左エ門町十三番地
文永堂　大嶋屋傳右衛門
同牛込區細工町十六番地
誠光堂　池田屋　清吉